小説神髄　上巻

E 20
32

# 小説神髄緒言

盛んなるかな我國に物語類の行はるゝや遠くしては源氏狹衣濱松住吉あり降りては一條禪閤の戯作類をはじめとして小野の阿通の淨瑠璃物語等あり近くしては西鶴其磧笑風来京傳のともがら前後物語をあらはして虚名を一世に博してより小説ますます世に行はれて世の狂才ある操觚者流は皆爭ふて稗史をあらはし或は滑稽洒落なる三馬一九の亞流あれば人情本に名を殘せる春水其人の如きもあり種彦は田舎源氏に其名をとゞろかし馬琴は八犬傳に譽をとゞめぬしかるに革新の變あるに際して戯作者しばらく跡を斷ち小説したがつて衰へしがけふこのごろにいたるに及びてまた大に復興して物語のいづべき時とやなりけんこゝかしこにてさま〲なる稗史物語を出版して新奇を競ふことゝはなりけり甚しきにいたりては新聞雜誌のたぐひにすらいと陳腐したる小説をば擯斥しつゝ載るもあり勢かくの如くなるから今我國に行はるゝ小説稗史は其類其數幾千万とも限としらず汗牛充棟なんど、言はむはなかなかにおろかなるばかりになん想ふに我國にて小説の行はるゝ此明治の聖代をもつて古今未曾有といふべきなり徳川氏の末路に當りて馬琴種彦等輩出してしきりに物



鷗外藏書
東京大學圖書之印
B 23475
000432269 9

語をつくりしかば小說盛に行はれて都鄙の老若男女と選ばずみなあらそふて稗史をひもときめでくつがへりもてはやせしかどなほ今日に比すると之は及ばざること遠かるべし其故はそもいかなる事といはむに文化文政の比にありては讀者もいくらか贅澤にてたゞ秀逸なる著作をのみあがなひもとめて讀たるから其他の拙劣なる小說稗史は自然に優者に壓せられて世に行はるゝことをば得ずむなしく原稿のまゝにて終りもしくは板木にのぼりし後にも紙魚の餌食となるもの多くて世にあらはれしは稀なるから其類其數現今に比すれば幾分か少かりけんかししかるに今日は之に異なり小說といひ稗史とだにいへばいかなる拙劣き物語にまれいかなる鄙俚げなる情史にても飜案にても飜譯にても飜刻にても新著にても玉石を問はず優劣を選ばずみななぐさみにもてはやされ世に行なはるゝは妙ならずや實に小說全盛の未曾有の時代といふべきなりさればこそ戯作者といはるゝ輩も極めて小少ならざれどもおほかたは皆飜案家にして作者をもつて見るべきものはいまだ一人だもあらざるなり故に近来刊行せる小說稗史はことごとく馬琴種彦の糟粕ならざれば一九春水の贋物多かり蓋しこのあひだの戯作者流はひたすら李笠の語を師として意を勸懲に發するをむね小說稗史の主腦とこゝろえ道徳といふ模型をつくりて力めて脚色を其内にて工風せまく欲するからに強ち古人の糟粕をば嘗むとするにはあらざめれど素と其範圍の廣からねば覺えず同轍同趣向の稗史をものすることあるべし是あに遺憾ならざらむやさはあれ斯やうになりもて來るも其罪偏に拙劣なる作者の上にありといはむ歟いな活眼なき四方の讀者もまたあづかりて力あるなり其故はいかにとなれば古来我國のならひとして小說をもて教育の一方便のやうに思ひてしきりに奬誡勸懲をば其主眼なりと唱へながらなほ實際の場合に於てはひたすら殺伐慘酷なる若くは頗る猥褻なる物語をのみめでよろこび他のかたくるしき筋の事は目を注めてだに見る人稀なりしかして作者の見識なき總じて輿論の奴隷にして流行の犬ならざるなければ競ふて時好に媚むとして彼の殘忍なる稗史をあみ彼の陋猥なる情史を綴り世の流行にしたがふものから勸懲といふをもてむねの名義もさすがに抛棄がたさにしひて勸懲に主旨を加へて人情をまげ世態をたえめて無理なる脚色をなすことなりけり此に於てか拙劣なる趣向はますます拙くして大人學者の眼をもつてはいとゞ讀むにたへがたかり是併ながら作者も讀者もたゞいたづらに稗史を弄して真の稗史の主眼をさとら

Teufel dazu

夫れ小説は無韻の詩ともいふべく字數に定限なき歌ともいふべし世の淺學なる輩にありては詩の主腦とする所のものは偏に韻語にありと思へど是はなはだしきひがことなり詩の骨髓は神韻なり幽趣佳境を寫し得なば詩の本分はすなはち盡せりなどてか區々たる韻語なんどと云ひて用ふるの要あらんや英國の詩仙彌ルトン翁は夙にこのことを切論して有韻の詩を排斥なし無韻の長詩(ブランクウバルス)を工風しはじめぬ思ふに韻語を用ふることも詩を吟誦せしむるに便りては頗る要用なりしならめど現世のごとくに黙讀してたゞ通篇の神韻をばめでよろこべる世となりてはさまで緊要なるものとも思えず物にたとへて之をいはゞ畫工が用ふる丹青にひとしくなくとも事は足るべきものなりされば小説稗史にしてもし神韻に富むよしあらむ歟之を詩といひ歌と稱へて美術の壇上にたゝしむるも敢て不可なきのみにはあらでまことに當然といふべきなり畢竟小説の旨とするところは專ら人情世態にありて一大奇想の絲を繰りて巧に人間の情を織なし限なく窮なき隱妙不可思議なる源因よりしてまた限なく定りなき種々さまざまなる結果をしいと美しく編いだして此人の世の因果の秘密を見るがごとくに描きいだして見えがたきものを見えしむるを其本分とはなす



ものなりけりされば小説の完全無缺のものに於ては畫に畫きがたきものをも描寫し詩に盡しがたきものをもあらはし且演劇にて演しがたき隱微の條をも寫しつべし蓋し小説には詩歌のごとく字數に定限あらざるのみか韻語などいふ械もなくまたさ演劇繪畫に反してたゞちに心に訴ふるを其性質とするものゆゑ作者が意匠を凝らしつべき範圍すこぶる廣しといふべし是小説の美術中に其位置を得る所以にして竟には傳奇戯曲を凌駕し文壇上の最大美術の其隨一といはれつべき理由となるらむも知るべからず

因云　菊地大麓大人が譯されたる修辭及華文と題せる小冊子ありて詩文に關はる議論の如きは最も精到と思はるれば左に抄出して本文の不足を補ふ

詩の區域に屬せる文章其類頗る多し而して其共通すべき品格を一定するは難事たるは從來歷驗する所なり然して句に節奏ある者を專ら詩と限るべからざるは散文にても毎に高尚なる詩旨を有する者の多きをもて之を明亮にするを得るなり況んや句に節奏を帶るものにして還て詩中に列すべからざるもの多きをや(中略)蓋し詩は題目に適する所の真正の物景は斯に一ありとは而して此の一種

Märchen = Romance
Romance = Novels.



妙に到らしむる良器具と云ふべきなり而して此種に屬する詩文の各状并にホーマーよりバヤジルに至る間に發顯せし文体の沿革及び中古の小説(羅マンス)より近時の人情話(那ベル)に移れる實況等は皆精密の詳解を要すべきものなれども此等は別に文字史に於て論究すべき大業にしあれば玆に詳説するに遑あらず然して此種の著書の方今近体格として尚ぶ所なる書は專ら其本色と人物とに於る活潑なる状をして益々人生の實事に適合せしめ以て世上万物の消長並に人間日常の情偽をして讀者の心胸に了然としてまた事實に相違せる考思なからしむるにあり因て此等の著書に表せる男女の動作事業は真に其風采を寫し出すを以て讀む者をして親く人世の情態に接する思を發せしむべし而して若し此風采をして讀者が曾て閲歴せし同事實と相符合せしむるときは讀者は為に瞿然快たるを覺えて自ら鑒むるの心を發すべく又人間至樂の事にして並に真理に違はざるものならしめば何等の種類の文字を問はず常に無上完全の地を占むるべきなりデホウ氏を世界實際の形状を表するに善く史詩体の文章を適用したる人にしてスコツトブルワア(笠頓をいふ)等の諸氏も亦歴史の教授方に此体を供用せり然して小説家が教導の目的とする所は通學勸善懲惡を旨とするなるが實に此目的並に其他の主旨も亦此術の進歩に因て愈々高上に達するを得べきなり然れども此種の文字は人間無涯の嗜好に供すべき者なれば其事の理に合ふと合はざるとを問はず一に時風の沿革に隨て之と相終始すべきものなり

## 小説の變遷

小説は假作物語の一種にして所謂奇異譚の變体なり奇異譚とは何ぞや英國にて羅マンスと名づくるものなり羅マンスは趣向を荒唐無稽の事物にとりて奇怪百出もて編をなし尋常世界に見えきたらぬ事物の道理に矛盾するを敢て顧みざるものにぞある小説すなはち那ベルに至りては之と異なり世の人情と風俗をば寫すを以て主腦となし平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料とし而して趣向を設くるものなりこれ只概略の辨なるから尚解しがたき由もあらねど其詳細なる本義のごときはしばらく之を下回に讓りてまづ變遷の次第を説くべしそも倩ら惟みるに小説野乘の行はるゝは其源遠く邈焉たる上古の時代にありといふべし其然る所以を知らまく欲せば試に社會の淵源に遡りて其状態を察せざるべからず

現はされども多くは此時代の羅マンスは總じて韻語のみを用ひて詩歌の体にものせしから今のいはゆる羅マンスと其名おなじうして体裁異なりさる程に羅マンスの種類もいつしかいろ〳〵になりてあるひは滑稽を主とするものありあるひは真事らしうもてなすもあるべし然して興情殺伐にかたぶく時には武勇をかたれる羅マンス出で時好柔弱に流るゝ國には宗旨に關する物語にあらずは情事に關する物語あらはるゝ此をもて那マン人種の羅マンスには勇士の偉業をのべたるもの多く索遜時代の古詩篇には宗旨に關するもの多かり我皇國の羅マンスは前の二ツに相反して住吉といひ伊勢といひまさかの式部の源語のごときも專ら男女の情事をのべたり蓋し優遊文弱なる當時の興情に應ぜしなるべし之を要するに此ころには人みな奇異を好める故にかりにも時好に投合せる奇異なる物語をものする時には世の人よろこびもてあそびて敢て妄誕無稽をとがめず且實際の事柄とは大に矛盾せることありとも却りて之を奇なりとたゝへて怪み訝る事なければ作者もます〳〵奇を求めて工風を費し文を練りてひたすら新奇の脚色をぞ結構なさまく企つべしされば此比の物語はひたぶる時好に媚ぶるをもて其目的とはなしけるから美術の主旨など

Fabel

しるべうもあらず且はものせる物語の真に似ざると似るとを問はねば咄々怪事を綴りいだして恬然あやしむ体なきのみかなか〳〵に之を得意とせり讀むものも亦さ之をめでゝ毫もうたがふさまもなけれど文化いま一としほ進むに及びて世の人やうやく羅マンスの荒唐無稽に倦むよしあり羅マンスしたがつて衰へいはゆる真成の物語（那ベル）おこる其沿革の次第のごときは更に下條にときわくべし

およそ奇異譚が世に行はるゝや寓言乃書もまた世に行はる所謂寓言の書とは何ぞ無稽が小說に諷意を寓して童幼婦女子が蒙を啓き奨誡なせるものすなはち是なり英國にていふ浮へイブルはすなはち件んの寓言なり以ソップ物語のごときは其一例とも見るべきものなり其他荘子の寓言のごときもまた此ものに外ならざるなり按ずるに寓言の書の世に現はるゝは當時の君子有徳の士が世の道徳の委靡して振はず人情澆薄に流るゝをいと歎かはしきことに思ひこれを濟はまくおもへるものから人みな遊佚懶惰にして書をひもときて讀むものまれなり況て人倫道義をときたる彼のかたくるしき書籍のごときは机に近づくるものだになければほと〳〵教誡の方法に困じつひに世上に愛玩せらるゝ彼の奇異譚の脚色にならひて架空の小說を結構なし暗に

奬誡の意を寓して世を諷せんと圖りしなるべしされば奇異譚と浮ヘイブル（寓言の書）とは其外形は同うして其內質は同じからず前者は娯樂を目的とし後者は諷誡を眞相となす浮ヘイブルの物語は浮屠氏のいはゆる方便にて其眼目にあらざるから其脚色は單純にて只皮相のみ閲するときにはいと淡くして味なしされども倩ら玩讀して其隱微をしりて味ふときには所謂寸鐵人を殺す深妙の旨趣を見る事あり猿蟹合戰の物語または桃太郎の昔話舌切雀かち／＼山皆浮ヘイブルの部類にして其皮相なる物語はきはめて甲斐なきものに似たれど其眞相を見るに及びて頗る深意ありと思はる

さる程に文運ます／＼進歩して開明の世となるに及べば浮ヘイブルはまた變遷して多少は進化なきあたはず蓋し文運の進むにしたがひ世の流行もむかしに似ずとかくに奢侈に傾きつゝ万の事みな贅澤なりて且は人智のすゝめるまゝあまりに甲斐なく淺はかなる彼の寓言の書なんどをめで喜びては讀まざるべし中にはまた傑作莊子のごときは長く具眼の士に尊まれて大人社會に行はるれどもかへりて其書の目的なりたる諷誡の旨は此時よりまたく効なきものとなるべし蓋し大人具眼の士は別に聖賢の書を閲して己に道義をしも辨知しをればまた寓言の書よりて之を學ばん必要なくたゞ其文の巧なるや其結構の妙なるをば賞玩なすに過ざればなりから、されば劣等の作にいたりては偏に童蒙の御伽なしとなりて若くは婦女子むらにもてあそばれてわづかに玩弄の一種となるのみ其目的たる諷刺のごときは全く通ぜざる事となるべし何となれば童蒙等はたゞ脚色にのみ眼をとゞめて其含畜せる寓意の所在を窺知ることなければなりけり譬ば我國の寓言なる猿蟹合戰の物語舌切雀の話などを見よ多少の寓意のあるべきなれども之を小兒にかたり聞かする祖母々親だに十に八九は寓意の所在とまでしはまれにてたゞ一通のつくりものと同一樣のものぞと思へり是みな進化の自然にして所謂浮ヘイブル次第におとろへ亞ルレゴリイ（寓意小說）おこる源因なりかし

亞ルレゴリイといふなるものぞ曰く假作物語の一種にして二樣の脚色を含めるものなり所謂二樣の脚色とは皮相に見えたる物語と隱微の寓意をいふなり今一例をあげていはゞ彼の有名なる西遊記のごときはすなはち此類の的例なるべし其皮相なる脚色につきて彼の物語を評するときには奇異荒唐架空無稽たゞよのつねなる羅マ

もてはやさる、のみにはあらで且よく感孚風動する至大の効力あるをば見つ世の人心を奨誡して萎靡たる徳義を正さんにはまづ其好める處によりて扨說いだすにあらざりせば奏功きはめて難からむと竊に覺悟する由ありすなはち浮へイブルを延長して其脚色をも複雑にし奨善誡惡の意を寓して彼の奇異譚と相ならべて世に發行するなと、はなりなんさきむ所謂亞ルレゴリイ(寓意小說)と勸懲主義の小說とは其源淵は相おなじく浮へイブルよりいでたれども其性質は大にたがへり其故はいかにとなれば寓意小說は勸懲をもて主眼となし物語をもて方便とせりさるから勸懲小說には物語をもて本尊とし勸懲をもて粧飾とせり故に寓意の小說にはいかなる不條理の脚色ありとも何等の荒唐なる話ありとも寓意の塩梅妙なりせば之をそしるに及ばざれども若し勸懲の小說にして其本尊たる物語に咄々奇怪の脚色ありなば勸懲の主旨は通ずるとも之を巧妙の小說とは決して稱へがたかるべし我東洋の勸懲作者は此變遷の次第をしらねばひたすら勸善懲惡をば小說稗史の主眼とこゝろえ彼の本尊たる人情をば疎漏に寫すはとうしからずや是しかしながら亞ルレゴリイと勸懲主眼の小說との差別をしらぬに出たることにて物にたとへて之を譏らば我軒下を借うけつゝ勸懲といふ主義を賣れる辻商人の風にならひて己れまづ軒下に店をいだして人情といふ品物をば其本店にてひさぎながらかたはら勸懲をもあきなひつゝいつしか店賣の本務はおこたりひたすら勸懲をば賣らまくほりして竟には店を閉すにいたりし嗚呼あきびとにひとしといはなむ

演劇もまた之にひとしくはじめはおほむね神代記の事蹟を演ずるものなりしが人智のしだいにすゝめるまゝ彼の寓意の書にならひて奨誡の意を傳奇に寫して世を誡むるの方便とせり此間に行はるゝ馬鹿ばやしといふものなんども畢竟古事記旧事記に載たる太古の事蹟の演劇にていまだ諷意を寓せざりし上古の遺風と思はれたる英國にていふ魅レクル夫レイも尊者聖人乃靈驗偉跡をたゞありのまゝに演ぜしものにて其大体より評語を下さば我馬鹿囃子の類なりなんしかして其后行はれし蒙ラル夫レイ(奨誡演劇)は之に異なり其質まつたく亞ルレゴリイを演ぜしものといふとも可ならむ演劇沿革の事につきてはおのれおのづから論あれども今要なきまゝこゝにははぶきつ

之を要するに演劇と奇異譚とは其發生のはじめにありては其質ほとほと相おなじく

たゞ新奇なる話談をのみ旨とし演ぜし事なりしが世の人情のすゝむにしたがひしだいゝ奇怪の條を除き荒唐無稽の脚色を省きて事を凡近にとりて意を勸懲に發せるにいたる斯られバ演劇の主腦の如きも亦これ人情風俗にて他の勸懲の主意の如きハ其目的にハあらざること瞭然として明かなりけり

さる程に羅マンス（奇異譚）も其荒唐なる趣向を減じて漸く世態の眞相をバ寫しいださまく力むることゝハ所謂進化の自然にして抗すべからざるいきほひなれども世の人情の陋うして嗜好充分に高尚ならざる文運半開の比にありてハ小說作者も見識乏しく自ら守るの勇なければひたすら流行時好を追ひて其物語をものすることゆゑ尚小說の神髓をバ修め得るにハ頗る遠かり之を要するに作者の本意ハ人情世態を寫さむとするにもあらず世を諷誡せむとするにもあらずたゞ當代の時好に媚び世の流行に投合して一時の虛名を射むとするのみ此をもて此時代の奇異譚作者が物したりし奇異譚中なる人情世態ハ其物語の主旨にあらで時好に媚ぶるの方便なり且また寓意の勸懲の如きも俗にいはゆる遁辭にて無益の書なりといはれじとて識者の譏を塞ぐが爲にかりに用ひたる方便なるのみ是また物語の主腦にあらねバ他の寓言家の著作



Roman

に比ぶれバ其獎誡に益なきこといふまでもなきことなりかし文化文政の比よりして我國俗のもてはやせし小說稗史ハ概してみな此種の勸懲小說にて眞の小說にハあらざるなりされバこそ具眼の士ハ我小說と鄙技とそしり有害無益とも罵るなれこれあに小說家の迷惑ならずや

さらバ眞の小說稗史（那ベル）ハいかなる時世に現はるゝぞ其奇異譚と異なる所以ハそもまた何等の邊にあるや曰く那ベル即ち眞成の小說の世に行はるゝハ概ね演劇衰微の時にあり其故ハそもいかにといふに總じて文化の淺かりしハ未開蒙昧の世にありてハ人皆皮相の新奇をよろこび眼のつけどころ密ならねバ何にてもあれ異常にして稍々注目を促がすべき新奇の性質あるものありなバ競ふてこれをもてはやして面白きものと思ふハ常なり且また此比の人の情ハ今の人情とハおなじからで怒りても喜びても亦哀みても樂みても總じて頗る激切なるから七情おのづから其舉動と其顏色とに見はれつゝ隈なく人にも見られしなり是併ながら道理力ハ作用きえせで微なりしから一時一旦ハ情欲をバ抑へ止むることかなはで心に思ふことをさへあらはに外面にうちいだしつまたハ舉動にも見えたるなりされバ此時代の人々にハ

觀者の耳に訴へはた其眼に訴ふるがゆゑに其場かへりて狹けれども小說にては之に反してたゞちに讀者の心に訴へその想像を促がすゆゑ其場頗る廣しといふべし演劇にては山水艸木遠近の景色家屋調度の位置あるひは畫をもて之を示しあるひは道具をもて之をあらはす其他雷電風雨のたぐひも總じて器械のたすけによりて觀者の視聽の官にうつたふ小說にてはこれらの事をも悉皆美妙の文にものして讀者の心の眼に訴ふさるからに小說にては讀者の想像の精疎によりて得る所の興おのづから異なり或るは文外の佳境に入りあるは文面のみの佳境にいる因云英の小說大家歐タル數コツト翁の小說などには殊に細密なる記文多かりある強賊の巢窟なりける洞窩のさまを記すにあたりて翁はことさらに家をいで、いまし賊の住みしといふある洞窩におもむきつゝ仔細に其四下を觀察なし且そのあたりに咲出たる種々さまざまなる艸花をば殘る所なく觀察して之を備忘錄にかきとゞめつさて歸りてのち其さまをば見るがごとくに寫しいだして物語の地となせしことありけり、斯る細微の景色を寫すは寔に興ある事なれどもそは是小說の長處にして他の演劇の道具をもてして表し得がたき事なりかし

是また演劇の小說稗史に劣る所以の不便にしてすなはち第三の不利なりけり尚此外にも演劇には一箇の重大なる不便利あり脚色の不便すなはち是なり演劇にては万の事みなもつぱら眼に訴ふると其本性となせることゆゑ前の齣にて見えたる事實と後の齣にて演ずる事實といくらか脈絡相通じて因縁あきらかならざるべからず殊に悲壯体(トラゼヂイ)の演劇にては其結局の悲話(滸ハイナル奇タストロツヘ)の如きは是非とも前の齣なりける因縁よりして来りしものとつくりなすをぞ必要となすことなり結局の悲話とはいかなるものぞといふにまづ悲壯体の演劇をば充分會得なさゞるときには其性質をしりがたかるべし悲壯体の傳奇小說もとより我國にも多くあれども其實ありて其名なければ是非なく二三の例をあげてお、に解釋を下しつべし譬ばちかごろ新富部にて團十郎等が演じたりし真田の張抜筒とかいへるものはすなはち悲壯体の演劇なり其他山門五三の桐もしくは幡随長兵衛の劇の如きは皆此類の物といふべし之を要するに其演劇の本尊となせる主人公(比イロウ)が其結局の齣にいたりてあへなき最後を遂るといふいと淺ましく悲しげなる趣向を旨となせるものなり

Tragödie

Stoffe d. Romans

嗚呼麻コウレイ氏の言をもて信なりとせむ歟従来の美術は次第におとろへ英國の文華を以てもまさ彌ルトンをいださゞるべく伊多利以國の高雅なるもまさ阿ンゼロをいださゞるべしひとり小説てふ美術に於ては望将来にきはめて大なり數コツトや笠トンや重マや委リオツトや近代の大家多しといへども力めて之に駕せんとせばけつして至難なりといふべからず嗚呼我文壇の才人雅客いたづらに馬琴を本尊としあるひは春水に心酔なしあるひは種彦を師とし崇めて其糟粕をばなむることなく斷乎陳套の手段を脱して我物語を改良なし美術壇上に列しつべき一大傑作をあみなへや

## 小説の主眼

小説の主脳は人情なり世態風俗これに次ぐ人情とはいかなる者をいふや曰く人情とは人間の情欲にて所謂百八煩悩是なりそれ人間は情欲の動物なるからいかなる賢人善者なりとていまだ情欲を有ぬは稀なり賢不肖の辨別なく必ず情欲を抱けるものから賢者の小人に異なる所以善人の惡人に異なる所以は一に道理の力を以て若くは良心の力に頼りて其情欲を抑へ制へ煩悩の犬を攘ふに因るのみされども智力大に進みて氣格高尚なる人にありては常に劣情を包みかくして苟にも外面に顯さゞるからさながら其人煩悩をば全く脱せしごとくなれども彼また有情の人なるからにはなどて情欲のなからざるべき哀しくも亂るゝこともなく樂みても荒むことなく能くその節を守るのみか怒るべきをも敢て怒らず怨むべきをも怨まざるはもと情欲の薄きにあらで其道理力の強きが故なり斯れば外面に打いだして行ふ所はあくまでも純正純良なりと雖ども其行をなすにさきだち幾多の劣情心の中に勃發することなからぞやは其劣情と道理の力と心のうちにて相闘ひ道理劣情に勝つに及びてはじめて善行をなすを得るなり彼の神聖にあらざる以上は水の低きにつくが如くに善を脩むる者やはあらんいくらの迷ふ心あるをばよく道理をもて抑ふればこそ賢人君子ともいへるゝなきはじめよりして迷なくんば善をなすとも珍しからず君子賢人などゝいはれんはなか〱に是おろかなるべし斯きば人間といふ動物には外に現るゝ外部の行為と内に藏れたる内部の思想と二條の現象あるべき筈なりまたして内外双ながら其現象は駁雜にて面の如くに異なるものから世に歴史あり傳記ありて外に見えたる行為の如きは概ねこれを寫せりといへども内部に包める思想の如きはくだ〱しきに渉るをもて寫し得たるは曽て稀なり此人情の奥を穿ち所謂賢人君子はさらなり老若男女

Romancier als Psycholog.

善惡正邪の心のうちの内幕をば洩す所なく描きいだして周密精到人情をば灼然として見えしむるを我小説家の務とするなりよしや人情を寫せばとて其皮相のみを寫したるものはいまだ之を眞の小説とはいふべからず其骨髓を穿つに及びてはじめて小説の小説たるを見るなり和漢に名ある稗官者流はひたすら脚色の皮相にとゞまるを拙しとして深く其骨髓に入らむことを力めざりしも主腦となすべき人情をば皮相を寫して足れりとせり豈憾むべきことならずやそれ稗官者流は心理學者のごとし宜しく心理學の道理に基づき其人物をば假作るべきなる苟もおのれが意匠をもて強て人情に悖戻せる否心理學の理に戻れる人物なんどを假作りいださば其人物は已に既に人間世界の者にはあらで作者が想像の人物なるから其脚色は巧なりとも其譚は奇なりといふとも之を小説とはいふべからず物はたとへて之をいへば機關人形といふ者に似たり匆卒にして之を觀ればさながら夥のまことの人間活動なるがごとくなれども再三熟視なすにはいたれば偶人師の姿も見え機關の具合もいとよく知られて興味索然たらざるを得ず小説もまた之にひとしく作者が人物の背後にありて屡々糸を牽く樣子のあらえに人物の舉動は見えなばたちまち興味を失ふべし試に一例をあげていはん歟彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の八士の如きは仁義八行の化物にて決して人間とはいひ難かり作者の本意もとよりして彼の八行を人に擬して小説をなほべき心得なるからあくまで八士の行をば完全無缺の者となして勸懲の意を寓せしなりされば勸懲と主眼として八犬士傳を評するときには東西古今に其類なき好稗史なりといふべけれど他の人情を主腦として此物語を論ひなば瑕なき玉とは稱へがたし其故をいかにとならば彼の八主公の行を見よ否其行爲はとまれかくまれ肚の裏にて思へる事だに徹頭徹尾道にかなひて曾て劣情を發せしことなし兎や一時瞬間といへども心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏にて鬪ひたりける例もなしよしや堯舜の聖代なればとてかゝる聖賢の八個までも相並びつゝ世にいでんこと殆々望みがたき事ならずや蓋し八犬士は曲亭馬琴が理想上の人物にて現世の人間の寫眞にあらねば此不都合もありけるなりさはあれ馬琴は凡ならざるよく巧妙の意匠をもてしく其牽強をば掩ひしかど讀者は毫もこれと知らずよく人情をも穿ちたりとふえたゝへさるは誤らずや斯いへばとて八犬傳をば小説ならずといふにはあらねど今證例に便ならんが爲にしばらく人口に膾炙したる彼傑作を引用せしのみ曲亭翁の著作に

つきてはおのれおのづから別に論ありそゑ折を得てとくよしあるべしされば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて我假作りたる人物なりとも一度篇中にいでたる以上は之を活世界の人と見做して其感情を寫しいだすに敢ておのれの意匠をもて善惡邪正の情感をば作設くることをばなさずして只傍觀してありのまゝに摸寫する心得にてあるべきなり譬ば人間の心状もて象棋の碁子と見做ばときには其直きこと飛車の如き情も尠からざるべく行く道常によこさまなる心の角も多かるべし桂馬の剽輕なる香車の了見なき或は王將の才に富て機に臨て變に應ずる縱横無盡の行あれば他ゞ進むべき前あるをしりて左右に避くべき道をしらざる匠歩庸歩も尠からずおのがじゝなる舉動をして此世局を渡るものから直なる飛車も生長なれば むかしの飛車におなじからず角も世故に長ずるにいたれば直なる道をも行くことあるべし或は王將も匠歩の手にかゝり或は慮なき香車にして金銀を得ることもありなん圍碁者は造化の翁にして碁子は即ち人間なり造化の配濟の不可思議なれば傍觀で觀るとは大に異なり「彼金などなく彼方へなりなを進むで王手となるべからん」と思ふに違ひて一匠歩にたちまち道をふさがれつゝ避退くべきひまだになうして桂馬の餌食となるなとありさまざま人間もこれにおなじく榮達落魄必ずしも人間の性質に伴はざるから或は才子にして業状なさゞるあり或は庸人にして志を得るあり千状萬態千變万化因果の關係の駁雜なる豫め圖定むべからず故に小説と綴るに當りてよく人情の奥を穿ち世態の真を得まくほりせば宜しく他人の象棋を觀て其局面の成行をば人に語るが如くになすべし若し一言一句たりとも傍觀の助言を下すときには象棋は已に作者の象棋となりて他人の某々等が圍したる象棋とはいふ可らず「あな此所はいと拙しもし予ならせば斯なはべし箇様々々に行ふべきに」と思へる、顔も改めずして只ありのまゝに寫してこそはじめて小説ともいへるゝなれ凡小説と實録とは其外貌につきて見ればすこしも相違のなき者たりたゞ小説の主人公は實録の主とおなじからで全く作者の意匠に成たる虚空假設の人物なるのみたれども一旦出現して小説中の人となりなむ作者といへども擅に之が進退なすべからず恰も他人のやうに思ひて自然の趣をのみ寫すべきなり彼の勸懲をもて主眼とせる和漢の小説作者のごとくに斯る情は此人物にはふさはしからずさる情欲をいだかせなば此人物の價を損ぜん如ず聖人君子に恥ざる立派の人物になしおくべしなど作者が岡目の手細工もて人の感情を

折衷なし勸懲といふ人爲の模型へ造化の作用をはめこむときには其人情と世態とは己に天然のものにあらで作者がみづから製作へたる誂向の人情なるから其人物を除くの外には決して見がたき人情なるべし夫小説の主人公はもとより假作の物にしあれば完美ならしめむとほりするときには作者の意匠の浮べるまゝにあくまで全美にこしらふるも敢て妨げざることなれどもたゞ豫め限界を設けて人情の外にいでざるやう工風を凝すを肝要とす譬ば画工が意匠を凝して佳人の肖像をものせむ折にもひたすら妖嬈ならんを望みてみだりにあるまじき眼を画き若くは眉口の類なんども人らしくなく寫しいださば其貌いかほどに美なりといふとも之を名画とはいふ可らず否名画とはいひ得べきも絶美の「人間」を描き得たる名画なりとはいひ難かりもし絶美なる未曾有の佳人を描き出さまくほりするならばまづ其蛾眉をゑがくに當りて世に蛾眉をもて名を鳴らせる佳人の蛾眉を雛形となしさて其眉を画きつべし星眸に於るもまた其如く世に星眸の譽たかき美人の眼を手本として其星眸を寫しつべし鼻唇はいふに及ばず面の長短髮のいろつや皆世にあるべき人間より其雛形をとり來りてえらみて古今に曾てあらざる絶美の婦人を描くべきなりもしかくせずして眉も口も



画工が自儘の想像よりつくりいだせしものならんには是人間の像にあらで人間以上若くはまた人間以下の像なるべし人物を假作するもまづその如く此處彼處なる人間より其性質の原素をもとめて併せてこれを一箇となし完美全良の人物をば小説中につくりいだしなば（もし其配合の方法鹽梅心理に違へる由なき以上は）敢て苦しからぬことなれども決して人界に望むまじき咄々奇偉なる人物なんどを作者が自儘の想像もて假作りいだしなば忌むべきなり前にも已に述たりし如くもと小説は美術にして詩歌傳奇等におなじけれどもまたおのづから詩歌傳奇と異なる所も尠からず譬ば詩歌は必ずしも摸擬をば主眼となさゞれども小説は常に摸擬を以て其全體の根據となし人情を摸擬し世態を摸擬しひたすら摸擬する所のものをば真に逼らしめむと力むるものたり小説いまだ發達せずして尚「羅マンス」といひしころには其体裁も詩歌に類して奇異なる事をのみ叙したりしがひとたび小説の体を具備して今日の小説となりたるからにはまた荒唐なる脚色を弄して奇怪の物語をなすべうもあらず是今日の小説稗史の一至難技たる所以なりかしされば人物を假設けてその情をしも寫さまくせばまづ情欲といふ者をば其人物が己に既に所有しをりと假定めてさてさま〴〵の事件な

ありて箇樣々々の刺戟をうくれば其人いかなる感情をおこすやまた云々の感情おこらば其餘はあまたの感情にはいかなる影響を生ずべきかまた從來の教育と其營業の性質とよりて其人物の性はさらなり其感情の作用にも何等の差違を生ずるかといと細密に揣り寫して外面に見えざる衷情をあらはに外面に見えしむべしもし人物が善人にて所謂實事師といふ者ならんには作者は力めて實事師が其折々に感じつべき感情をのみ摸寫しいだしもし人物が惡質なりせば邪曲し心に抱きつべき感情とのみ寫すべきなりされどもことをなすに當りて善人にも尚煩惱あり惡人にも尚良心ありて其行をなすにさきだちいくらか躊躇ふ由あるをば洩して寫しいださゞもあらば是まさ皮相の狀態にて真を穿さぬものといふべし聞說熱心なる油繪師は刑場なんどへも出張して斬らるゝ者のそのかたちはさらなり斷頭手の腕の働きさ筋骨の張たるさまにも眼を注ぎて觀察をするとか小說作者もまづそのごとく性の醜きものも情の邪なるものも敢て忌嫌ふことをばなさで心をこめて寫さゞもあらばいかでか人情の真に入るべきされども淫猥野鄙にわたれる隱微に過さる劣情をさへに寫しいだせよといふにはあらず蓋し小說は美術なるから彼の音樂に鄭声を忌み繪画に猥褻の像を嫌ひまた詩歌傳奇に鄙野なる言詞を用ふることを惡むが如くに鄙猥と語るを惡めばなり英國の博識「如ン茂ルレイ」が「文ジ委リオツト」女史の著作を評する語にいへらく(上略)なべて文學の主旨目的は人生の批判(クリチシズム)をなさんが爲のみと往古の識者もいひたり小說はも文壇なる一大美技とも稱ふべきに却て屢々賤められて最下に其位置を占るものはそもそもまた何故ぞや想ふに人生の批判を見るべき小說稀なるに因ることなるべし世に操觚者流多しと雖も造化の文才を人に附與ふるや配剤一樣ならざるから見識の淺きものあり意匠の足らざる者あり概して評を下すときには一大奇想の糸を繰りて巧に人間の情を織なし限なく窮なき隱妙不可思議なる因源よりして又かぎりなく定まりなき駁雜多端なる結果をしもいと美しく編いだして此人生の因果の秘密を見るがごとくにいとあらはに說明めたる著作はすくなしおよそ人生の快樂は其類きはめて多きが中にも人の性の秘蘊を穿ち因果の道理を察り得るほど世に面白きことはあらじさはあれ人生の大機關とばいと詳細に察り得るはもと容易ならぬ業にしあれば淺識菲才の操觚者流の得てなすべうもあらざるなり其才稠人の上にぬきんで不撓の氣力を有する者のみ特りこのことを得爲すべし總じて文壇の技術に

してやゝ高等なる位置をしむるものは此人世の大機關を覺るを以て主眼となしまさは目的となさゞるなし宗教といひ詩歌といひ哲學といひ其名はよりて形こそかはれ其主旨とはる所をとへばなべて人間に關する者にて其性質と運命とは何等の自然の機關によりていかなる具合にかはらくや其殘る蘊なく説あきらめて世間の人の迷妄をとき又疑ひの雲をも拂ひて好奇の癖をば慰むるにあり人此般の書を讀みなばよし其深理は解し得ずとも尚人世の評判記の興あることは覺ゆるなるに卷を閣くこと能はざるべし蒙昧不學の徒にありてはこれらの書籍を讀むといへども爲にみづから悟をひらきて反省取舎をなすにはいたらずとも事の曲直是非當否はおぼろげながらに判じ得べし(中略)委りヲツト女史の小説はかゝる觀念の畑へしも讀者を導く捷徑なりされども女史は獨斷をもて此行は宜しきことなり此行は不可なりなど曾て指示することは好まず唯あからさまに事物の因果を見るが如くにかきあらはして褒貶取舎は總てみな讀者の心に任したりき女史はなほ人の爲に種を蒔く者のごとしみづから穫を収めずして他人の之を拾ふに任して毫も妬めは氣色もなし云々といへり詢に茂ルレイ氏のいへるがごとく苟にも文壇の上にたちて著作家たらむと欲する者は常に人生の批判をもて其第一の目的としまうして筆を操るべきなり

されば小説は見えがたきを見えしめ曖昧なるものを明瞭にし限なき人間の情欲を限ある小冊子のうちに網羅し之をもてあそべる讀者をして自然に反省せしむるものなり造物主は天地万象を造りて私なし恰も我党小説作者が種々の人物を假作りいだして毫末も偏頗愛憎なく行住進退なべてみなひたすら自然に戻らぬやう寫しなせるに似たりといふべしさもあらばあれ造化の翁が造り做したる活世界は極めて廣大無邊にして規摸のあまりに大なるから凡庸稚蒙の眼を以ては原因結果の關係をば察り得ることいと〳〵難かりしかるを我党小説作者が其因果の理の要を摘みて一小冊子のうちに藏めて點撿取捨する便に供ふ其任豈に重からずやもしよく奏功なば由ありなば其功もまた偉大ならずや

因に云本居大人が「玉小櫛」にて源氏物語の大旨を論じていへらく此物語の大旨昔より説どもあれどもみな物語といふものゝ本旨をたづねずしてたゞよのつねの儒佛などの書のおもむきをもて論ぜられたるは作者の本意にあらずたま〳〵彼の儒佛などの書とおのづから似たるところ合へる趣もあれどもそをとらへて總

ばへは物またとへていはゞ蓮をうゑてめでむとする人の濁りてきたなくは何ぞども泥水をさくるが如し物語は不義なる戀をうたふるも其けがれたる泥を愛でゝにはあらで物のあはれの花とさかせん料ぞかし源氏の君のふるまひは泥水よりおひ出たる蓮の花の世にめでたく咲きにほへるたぐひとして其水の濁れることをばさしもいはず只なさけふかく物のあはれを知れる方をとりたてゝよき人の本にしたること云々といへり

右に引用せる議論のごときはすこぶる小說の主旨を解してよく物語の性質をばいときあきらめたるものといふべし我國にも大人のごとき活眼の讀者なきにしもあらざりしかどもそは絶無にして希有なるから他の曲學者あやまりきて彼の源語をさへ牽強して勸懲主意なるものなりなどいひまたり見に講釋せる和學者流も多しと聞くは豈そはなはだしくあやまらずや

## 小說の種類

小說を其主意より見て區分すれば二種あり曰く勸懲曰く摸寫即ち是なり勸懲小說は英語にては「ダイダクチツク。ノベル」と稱して專ら獎誡を主眼としく人物を假作り脚色を構へて世を諷誡せんとつとむる者なり曲亭馬琴以後の著作は概ね此種の者と思はる勸懲小說にもおのづから二種の別あり一を褒譽といひ一を誹刺といふ褒譽は仁義禮智等の八行を本として暗に全編の列傳と設け其行爲を尊むべく仰ぐべきを示して讀者としておのづからこれを景慕するの念を起さしめて瞑々裡に良道に導かんことを期す馬琴が仁義八行を列傳として八犬士傳を綴り智仁勇を人に擬して朝夷奈巡島記とあらはせる皆これ主意に外ならざるべし誹刺は全く之に反して暴虐非道の行爲をばべ若くは不義不孝の狀をあらはしあるは痴愚の笑ふべきを寫しあるは醜行の恥づべきを描きてもて訓誡せんとつとむる者なり曲亭翁の夢想兵衛の物語式亭三馬の浮世床浮世風呂をはじめとして福内鬼外の戯作類は總じて此類の物と思はるさはあれ馬琴の著作の如きは概ね褒譽と誹刺とを兼たり殊に晩年の作に於ては褒貶自在にもなせしものあり美少年錄の如きは其例なりまた誹刺法にも二樣ありて嚴正なる事馬琴の美少年錄の如きものあり或は滑稽洒落にして一讀人を笑はしむる鬼外の戯作に類するものあり

摸寫小說（アーチスチツクノベル）は所謂勸懲小說とは全く其性質を異にしたるもの

Realistic Rom.

に其主意偏に世態をば寫しいだすに外ならざるなりされば人物を假作するにもま
た其脚色を設くるにも前に述べたる主眼を體して只管假空の人物をして假空界裡に
活動せしめて眞に逼らしめむと力むるなり譬へば詩人が詩歌をもつて眞景を寫し
眞情をのべ畫工が丹青をもて花鳥山水を描き彫像師が鑿をもて人または獸の形を彫
れるが如く專ら眞に逼るを主として趣向を搆へ列傳をまうけ人情世態を穿てるもの
なり故に此種の小説に於てはあながち奬誡の意を寓して脚色をまぐる事をばなさず
ひたすら世間にあるべきやうなる情態をのみ描きいだしてさながら眞物のごとく見
えしめむことを望み力めて天然の富麗をうつし自然の跌宕を描き讀者をしてしらず
しらず其假作界に遊ばしめて而して隱妙不可思議なる此人生の大機關をば察らしむ
るにあるものなりされば摸寫主意の小説には求めずして誹刺諷誡の法そなはり暗
に人を教化するの力あり就中かの意ともて現世の情態を寫しいださば其物語は(よ
しや其事件と人物の如きは全く假空のものなりとも)恰も現世の風潮を示し時好の
趣く所をしらしめ輿情の傾斜を察らしむる一活歴史ともいふべければ具眼の人にし
て之をよまば彼の迂遠なる傳記を繙き時代違ひの事情を採りて因果の理を察るに似

Hist. u. social

ずまさに二三回の經驗によりて反省覺悟するなる益鮮きに勝りて其効能を覺ゆること果
して小少ならざるなりされども我國の小説作者はことさらに道理をさとらざるにやひ
たすら笠翁が語を師として小説といへば必ずしも事を凡近にとりて意を勸懲に發せ
ざれば叶はざる事のやうに思ひて奬誡といふ摸型をつくりて強て趣向をそのうちに
て工風をさま〴〵なしたりしはいとも鳴呼なるわざならずや

さてまた小説を其編中に記載せる事件の性質によりて區分すれば更に二種の小説と
なるなり曰く往昔(時代)曰く現世(世話)即ち是なり往昔物語は既往の事蹟を本とし
て若くは歴史上の人物を主人公となして以て一篇の脚色を搆へ現世物語は現世の情
態を材料としてもて其趣向を設くるものなり我國の小説は概ね往昔物語即ち時代小
説ならぬは希の馬琴の著作はいへば更なり俗に稗史と呼ならせし眞名まじりの半紙
本は概して此類の物なりけりしかして紫式部の源氏物語爲永春水の情史等は總じ
て現世物語の部類といふべし
左に載るは小説の種類を表する略圖なり

三位の狭衣なども専ら上流の情態を寫せる好き世話物語と稱しつべし

## 小說の裨益

小說ハ美術なり實用に供ふべきものにあらねバ其實益をあげつらはんことなか〳〵に曲ことなるべしさハあれ音樂繪画の類にも暗に實益の存ずるごとくに小說稗史の場合に於ても作者の敢て望まざりける裨益あるひハ尠しとせず蓋し美術家の望む所ハ偏に美妙の感覺をあたへて人を娯ましめむとするにありて敢て他に望む所あらざれバなほ前にも已に論じさるが如く美術の妙工神に入りて完美の程度に達れるものハ大に人心を感動して暗に氣格を高尚になし教化を裨補する由あれどもそハ妙工の神に入りて自然に生ぜし結果といふべく決して美術の目的ならねバ其直接の利益といはんハいと大なる謬なるべしかゝれば小說の利益をのべんとするにハまづ豫め區別をまうけて一を直接の利益となし一を間接の裨益となすべし直接の利益ハ人心を娯しましむるにあり語をかへて之をいへバ小說の目的ハ娯樂を人に與ふるにあり娯樂にも種類多かり而して小說の目的とする所ハ人の文心を娯ましむるにあり文心とハ何をかいふ曰く美妙の情緒これなり夫人野蠻にあらざるよりハ皆風流の妙想と娯み高雅の現象を愛せざるなし苟も美妙の感覺を抱けるからにハ富麗なるものを見てハこれを樂み豪宕なるものを見てハこれを愛し或ハ尊嚴偉大なるものを見てハそゞろに畏敬するの念を生じ或ハ壯快激越なる者を見てハわれしらず感激奮發なし瀟洒婉曲なるものを見て喜び洒々落々たるものを見て樂む蓋し人間の常性なりかし此感情に投合してもて人心をたのしましむるハ即ち美術家の務にして我小說家の目的なりもし小說に載る所よく人情の髓を穿ち細に世態の秘蘊をさぐりて富麗なる者も宏壯なる者もおもしろきものもをかしきものもあまさず綴りて寫しいださバ爭でか文心を感ぜしめざらんや況んや小說の主とする所を音響にあらず色彩にあらず此活世界の人情なるから一事一物總じてみな活動なさんず趣あり彼の音樂と繪畫に比ぶれバ興味一層多かるとも決して劣れる由ハあらじさらぬだに「如ン茂ルレイ」氏ハ人間世界の批判をもて人生の一大娯樂といひたり小說ハ即ち人生の評判記にて甲の失敗なしたる所以乙の成功なしたる所以或ハ權力を得て道義心の腐亂する趣或ハ情に牽されて道理を誤る次第歷々編中に叙しいだしてもつて讀者の評判に供ふ具眼の人にしてこれをよまバ其興情のふかゝること他の經書をよみもしくハ又正史をよむの

比にはあらじ是泰西の國々にては大人學士といえる、人々皆爭つて稗史をひもとき快樂をもとむる所以なりかし我國俗はいにしへより小説をもて玩具と見做し一つ作者もまた之を甘んじ敢て小説を改良して大人學士を樂ましむる美術となさむと思ひしものなしさるから我國の小説稗史は之を泰西の小説と比ぶる時は恰も歌川家の畫工がものせし浮世錦繪といふものをば狩野家の繪畫に比ぶるごとし錦繪かならずしも拙きにあらねど所謂高雅の質に乏しく世の文心を慰するにたらねば纔に童幼婦女子にのみもてあそばるゝを務とせりさればこそ小説固有の利益といへば春の日長に獨坐の睡魔を破り秋の夜永に寂寥の鬱陶を醫する只此効能あるのみなりと我國俗は思ひしなれ是しかしながら小説をもて婦女童蒙の玩具と見做して美術視せざりし誤りより原因なしたる過失にて其罪おほかたは見識なき作者の上にありといふべし以上に述たる所をもて小説稗史の直接なる利益はおほむね盡しにされば更に間接の裨益を説くべし間接の裨益は一にしてたらず曰く人の氣格を高尚になす事曰く人を勸奬懲誡なす事曰く正史の補遺となる事曰く文學の師表となる事即ち是なり

（第一）人の氣格を高尚になす事





總じて美術といへる者には此大裨益ある由とぞ已に前段にも論じおきしがいま要略して再びのぶべし夫れ小説は人間の肉欲に供する者にあらで其風流の嗜好に投じて娯樂を與へんと望むものなりしかして風流の嗜好美妙の感情はもつとも高尚なる情緒にして文華發暢し開化進達せる國人ならでは決してこの情緒を有することなし彼の蒙昧の野蠻を見るにひたすら肉体の欲に耽りて所謂妙想を樂むことをしらねば造次顛沛行住坐臥も其爲にするところを問へば皆肉欲に外ならざるはなし故に其心は卑野になかれてたゞおのが利のみ是求めて殘忍なることも酷しく物の可憐といふことをば毫末だにも解せざるなり蓋し劣情の爲に身は責られ卑欲のために追るゝから道理はまほし〳〵退縮なし良心はいよ〳〵力を亡ひ特り卑劣の情欲をして專ら發動せしむきむなりよしや蒙昧の民なりともひたすら功名富貴を求めて競利場中に奔走なし毫も其欲望を休めしむることなく單に塵界の榮利にのみ其心をしも傾け盡さば或は人情に戻りやすく或は私欲に偏しやすく卑劣陋猥の心にしも流れざらむとかぎらねど雖ども豈よくこれを制め得んや是しかしながら其胸懷に彼れ綽々たる餘地なきまゝそぞろに情欲が奴となりて其指頤をしも受くればなるべし此劣情を制するには道理

りひとり小説のみにあらず総て文壇に遊ぶものは此心もて筆をとらざるべからず此用心に乏しき輩は全完からむことを欲してみづから欠き活さまく欲してみづから殺を惜むべきかな
総じて法則といふ者は俗にいふ忠告と同種のものなりと思ひて可なり忠告はいまだ事に着手せざる前にありてこそ用をもなせ已に事に着手して後に「なかしては悪し斯く〳〵せよ」といへれなば仮令失策すべき所とそれがために助かりしにもせよ其事の所置ぶり何とやらむ不手際にて成切りし後にてもいと醜き廉多かるべし法則もまたそのごとくいまだ趣向を構へざるまへに充分これを細嚼して会得しつくすこと必要とぞもしなからずして規もて物の長短を度るごとくに毎回規律に拘泥して其物語を編みもてゆきなば例の摸型の作となりて見るにたへざるものともなるべし老錬の作者には期せずして功を奏することあれども初心の作者には期して功を奏せざることいと多かり思はざるべからざるなり
下に述ぶべき数ケ條とは名々て法則とはいふものから其實咄嗟の議論にしてもとより周全なるものならねば言ひもらしたるも盡さざるも極めて多かるべき事なりかし



殊に稗官傳奇のさくひは其人々のうまれ得たる才の多少と優劣とによりて重に巧拙を生ずるものゆゑ天賦の才なき人にありては幾百千の法則をば限なく諳じ得たればとて毫も法則規律を知らざる自然の才子に劣りつべしむかし馬琴が京傳翁の門を叩きて戯作を學ばむと乞ひたりしに戯述は師傳の技にあらずと翁がいろひて其乞をば退けたりしも宜なるかな故に小説の法則なんどは所謂以心傳心にて得ていひがたき物多かりなうるとおもひてあらうさまに法則といふ名を設々て此に論辯する所以のものは我浅識なる小説者流に小説といふ一大美術の其目的のある所と残る隈なく知らせんとの老婆心切にいでたる事にて決して以心傳心なる真の法度を語るにあらねば世の賢明なる博識たち妄に法則の二字をとらへておのれの不明とば咎めたまひそ且や下條に述ぶるところはおほむねおのれが管見にてあるひは非なるもの多かるべし識者もし嘲嘘の唇を轉じて一言一字の師となられもせば寔に編者の本意にして幸こよなうも侍らむかし

## 文體論

文は思想の機械なりまた粧飾なり小説を編むには最も等閑にすべからざるものなり

を開きてみづから得失を考ふべし

(第二)俗文体

俗文体は通俗の言語をもてそのまゝに文となしたるものなり故に文字の意味平易にして嘗に解しやすきの徳あるのみかは別に活動の力あるから所謂華文に必要なる簡易の品格明晳の品格はいへばさらなり峻抜雄健なる勢力あり追懐愛慕の想念をも惹起しつべき品格あり加之時としては文字の音調氣韻と共に頗る情趣に適應してよく心底の感情をば表しいだすに妙なることあり此をもて泰西の諸國にはいふもさらなり漢土の如きも小説には地の文章を除くの外はなるべく通俗の語を用ひて事物の形容をうつすなりけり俗文体の利すでに斯のごとしといへども特りいかにせん我國にては言文一途にいでざるから文章上にて用ふる言語と平談俗話に用ふる言語とさながら氷炭の相違ありさるからに俗言のまゝに文となすときにはあるひは音調の侏儒に失しあるひは其氣韻の野なるに失していと雅びたる趣向さへに爲にひなびたるものとなりて俚猥の譏を得ること多かり且西の國々とはことかはりて言語の變遷はげしきのみかわずか數百里以内にして其方言の異なること彼の英佛の國語の相異なれるに似たるものあり故に時代物の小説には此文體を用ふることきはめて不便の限にして且不都合なることゝいふべしたゞ彼の當世の物語(世話物語)と此文體もて綴りなさば情文双ながら相適ひてすこぶる精妙なるべけれどそれだに幾分か斟酌して折衷せざれば叶ひがたし彼の爲永派の作者といへどもやゝ嚴格なる條にいたれば間々演劇の臺調めきたる詞をいくらか假用ひて俗談をもていひ得がたき不便の條を補ひしは讀む人もまた知ることなるらん曲亭馬琴かつていへらく

唐山にて俗語をもて綴れる書に正文あり方言ありしからざれば用をなさず又儒書方書佛教は正文なるべきものなれどもそが中に俗語あるは二程全書朱子語類。俗語をもて綴りしは寄功新事傷寒條辨虚堂錄光明藏の類なほあるべし先輩己にこの辨ありかゝれば彼が文華なるも言魂の資を藉ざれば文を成すに如意ならず矧やまた皇國の文章は和漢雅俗今古の差別ありさるを今文場に遊ぶもの孰かよく貫通せんいと難しともかたからずや想ふにいにしへの艸子物語竹取宇通保源氏物語なども作者つとめて其詞をあなぐり撰みて綴れるにはあらざるべし必是當時大宮人のつねのことば方言さへそがまゝに載さめれど古言はおのづ

から鄙俗ならず且宮嬪の詞にハ雅俗うちまかしさるもあれど才子才女ハ其品殊にて且能文の所為なれバ後世和文の山斗たりかくれバ昔の艸子物語ハ此にも俗語もて綴れるを思ふべし和漢その文異なれども情態とよくうつし得て其趣と盡せる者俗語ならざれバ成をおと難かる彼我れなじく一揆なりさきバとて今此間の俚言俗語の轉訛侏離の甚しさとそがまゝに文になをべからず余が駁雜の文あるハこの侏離鄙俗と遁きんとてなり云々

俗言の不便多かる實に馬琴翁の言のごとしれのきに於ても此議論と賛成せざるを得ざるものからなほ幾分か此議論と相徑庭ある由なきにもあらねバいさゝか持論に陳述して更に俗文を論明すべし

夫き小説ハ情態とうつすをもて其骨髓となすものなり故に下流の情態をバ寫しいださまくほりするときにハ其人物の言語なんどに鄙俚猥俗なる言語あるハもとより脱きがたきことなりかし其趣ざに盡しさらバよし其言語ハ鄙俚なりとも是なからくに下流社會のまことの景狀にほかならバ此故をもて俗言をバ我小説に用ひがたき文句なりとハいふ可からず垤ケンス翁の小説ならびに不ヒイルヂング翁の稗史などにハ随分えなえだしき俚言などいくらともなく用ひさきども其故ともて垤ケンスと譏りて評せしものなくきバ亦不翁をも罵るものなし不翁の著作ハ鄙猥なりとて排斥をるものハ多くきどもそハ其趣向の猥褻とバ擯斥するよりいでさることにて文章の上をいふにハあらずかゝきバ轉訛の方言なりとも侏離はなハだしき俚語なりとも其機くに相應じて用ふれバ敢て妨なくかへりて趣深かるべしさハあれ我國の俗談平話ハ兎角に冗長に失する弊ありならびに語法に定律なく且音調の美ならざるがゆゑに叙文（事物の歴由を叙する文章をいふ）ならびに記文（事物の形狀性質等状記するもの）等にハ用ひて妙ならざるところ多かり蓋し其冗長に失する所以ハ我本来の優柔なる倭言葉に因するなるべく其用語法に定律なく且音調の美ならざるハ和漢の言語轉訛の方言相混じさるに基くなるべし加之俗談にハ語法に三段の區別ありて上流の人に對する言語と同等の人に對する言語と下流の人に對する言語とれの〳〵著明しき相違ありて彼の西洋の國語と異なり而して同等以下の人に對する言語のごときハなと〳〵過去と現在と未来の區別のなきものあり譬バ「更に行衛のしきざりしかバ」といふ叙事体の文をものするときにも「更に行衛が知れぬから」ともいひ得

るからには倭文の文法を守らんこと勿論當然のことなれどもさればとてあまりに文法にのみ全く心を奪れつゝ小說稗史の本分たる人情世態を寫しえずばまことに益なきことゝいふべし

第二には俗体に偏ること是なり和文を深く心得ざるやからがなまじひに多く俗言をまじへ用ひんと試るときにはおほむね淨瑠璃本または端歌めきたる文體に流れ易く音調は實に滑かなる所もあれど其聲いやしうしてねと〱讀むにさへざるものあり瀨川如幸があらはしたる鼎臣錄のごときはやゝ此譏あるを免れざるべし

さらばいかなる文章が此文体の本質かといへんに八犬傳美少年錄などは此体の文をもて綴りたる大筆の小說なりこゝに拔文を擧ぐ讀むで其一斑を窺ふべし

⊙這の眉上の黒子さへ一對なるは親子の徵おの兒の顏と御身の容止似ずや肯ざるや見ねへといひつゝ鼻紙に附たりし懷中鏡をとり出して照して見せつゝ推向て珠よ你の爹々公ぞや抱かれねへと搔遣ればまだいはけなき珠之助も爭ひ難き血脉の恩愛爹々樣のうと呼かけて携るを聽て引よせて膝にのせたる瀨十郎數々ばこそあれ目に脆き淚歟露のひと滴云々（美少年錄）

⊙さらば左いへん右いふて身の憂事をつげの櫛鬢の後毛かきあげて人まつ緣の夕化粧鏡も刃自にありものとうち向へども影暗き日は沒果て燈火のおちへとどかぬ片ごゝろうゝる爲にと貯の坐席遣の蠟燭も流れ渡りの身にしあれどよろづよき日と暦手の茶碗を覆す糸底にさゝる彩る唇燕脂の笹色も香も知る人に見せなんとての所爲なりけり云々（同上）

⊙客もあるども沙量ならねば是より酒醼えやまりて獻つ酬につ果しなき議論に興を催しゝる朱之助ははや薄醉の多辯に任して屬日鬱氣を慫々とうち喞ちて媒妁の目の前にてかういへばをかしからぬ不走向に似されども岳母の旦ても暮ても苦虫を嚙潰して四角四面乃氣顎高く斧柄もまた烏と共に起て糸を繰り機を織るこれより外に所作はなし今樣早唄ころ事ぶりまたの說經。弄齋擲節を學びさりやと問へばおらぬと答ふ況てきのふけふは田舍までも弄ぶ三絃なんは手で彈く物やら足でかきならす物なるや夢にだも見たることはあらず偶然にものいひかけても泣出したげなる面色して返辭をするのみ餘情もなく寐るときざにも三ツ指にて許させたまへといひながら蒲團の端へ如恐怖に枕引

ハ酒と水との加減のごとし折衷文を愛する作者ハよく深しく此意を味ふべし
因云おのれが友人某かつていへらくおのれ借ら此間の小説家を見るに概ね馬琴に心醉せるもの多しさるからに其文ハ一向に彼翁をまねびて餓さるが如き文あり痩さるが如きあり甚しきハまさく死しさるが如きもありけり豈笑止ならずや馬琴翁ハ源語平語太平記水滸西遊等の文を折衷して彼一大機軸をいだせしなり所謂翁が自得の文にして杜撰もあれバ牽強もありさハあれ翁の牽強杜撰ハ翁が自在の才筆もて臨機應變にものしさるものなるから機によりてハ牽強杜撰もかへりて神妙なる所もあり蓋し翁が自在の筆もてみづから加減とすればなるべしさると今の世の作者輩ハかこらと毫も思ハざるにや將力の及バざるにや善も惡きも馬琴をまねびて翁が杜撰の文句をだに手柄貌にとりいだしきて左もあるまじき文句の續へおひてはめこまんとをるもありあり豈はなはだしく謬らずや小說文を學ばんとせバ宜しく翁の本據に遡り源語平語太平記等を讀味ひて更に一機軸を工風をべし源語平語等實に名文の傑作なり彼をとりて更に折衷の文をなさバむなしく馬琴の翁をおこし小說文壇に推をべきやハ馬琴を學バずよしや其髓を得るよしありとも到底後の馬琴さるに過ず其上にいづるハかたし往古の小說文をとりて新に折衷の文をなさバ其文ハ一家の文なり他人の文にあらず馬琴の文と拮捍をべくまた彼を壓し得べしあにまたのしからずやといひけりまことに格言なるかな

(乙)艸冊子体ハ雅俗折衷文の一種にして其稗史体と異なる所以ハ單に俗言を用ふること多きと漢語を用ふることの少きとにあり故に跌宕豪壯なる情態形容を敍をるに當りて彼の雅文体と同樣なる不便不如意を感ずることありさハあれ漢語を用ふることをバ強ち忌むといふにもあらねバ將來此体を用ふる作者ハ其時々の便機に應じて多少の漢語をとりまじへて件の不便利を補ふとも決して不都合にハあらざるべし想ふに此体の文章にて漢語をつとめて除きたりしハ假名文字のみにて書たるからに讀者が之を讀みたるときに解しがたからんかと思へバなるべし且や艸冊子といへるものハ專ら幼童婦女子輩の玩弄ぐさに供せしものゆゑつとめて漢語を除きたりしもまた當然の事といふべし

へし此あたりへ来りし上素姓ととはん為ぞかし(中略)と言葉を盡していふと
きゝ少女はしばし黙然たりしがやゝあつて泰然と形をあらため翁にむかひて
おん身が明察感じいる星をさしたる其ことば今はつゝまん要あらねばいかに
も實を告ぐべきがこれより先に妾もまたおことに乞はんものこそあれきゝ入
れてたまふべきやと言葉もにはかにあらたまり云々　(種員)

⊙伊達五郎其儘たゝずみ五人のものゝ潜びたるくさむらにきつと目をつけ何事
かいえんとせしが思ひかへを由やありけん傘うちひらきふりかたげ聲さへい
とゞ高々と「此ものどもと手の下にうつは如何なる鬼神か人間業にはよもあ
らじトわざかに謡ふ熊坂にふりさけ見ればなぎなたの形に似たる月影は雨後
の雲間にとぎざされこゝ青墓にあらなくて旅のやどりはあなたぞとあゆまん
として二足三足よろめきながらふみとゞまり呵々と高笑ひゆう〳〵としてあ
ゆみゆく云々　(同前)

右の二文章の如きはほと〳〵稗史体と分別する能はざるものなり種彦翁といへども
田舎源氏の文章には多く雅言をまじへ用ひこゝ地と詞とを綴りいだせり蓋し艸冊子の



文章には近代の俗語多かるから専ら俗語とのみ用ふるときには時代違ひの情態とは
叙するに不都合あればなるべし
畢竟ずるに艸冊子体は世話物語の文章には至適至當のものなれども時代物語とも
するにはいまだ適ひたりといふべからず何となれば已に前にも論じたるがごとく足
利時代もしくは又保元の比の人の言葉を俚語俗言もて綴りいださば唯何となく虚
作めきて其情合の移らぬのみかはまた此間の俚言俗語に得ていひがたかる詞もある
べし蓋しいにしへの人情風俗今とは頗る異なるから其日用の言語の如きもまた随つ
て異なればなり假令また作者の才筆もて巧に件の不都合をば掩ひ得る由ありとする
も別に一條の不便利あり之を全く除かんこと決して望みがたき事なりかし例へば艸冊
子の作者輩が時代物語を綴るに當りて豪傑もしくは貴紳なんどの言葉を綴りいだす
折にはおほむね雅言を多くまじへて「そなた」といふべき所も阿女といはせ「云々しや
れ」といふべきをも「云々したまへ」といはせなどすしかるに下流の人物たる男女の言
葉のうちには「ござんせ」といふ詞もあり「悪らしい」といふ言葉もあり畢竟するに下流
社會は概して世話物の趣ありて他の時代形にかきなしさる上流社會の趣とはさな

ば實錄紀行等にては其篇中にしるせる事元來つくり物にあらざる故一回毎に一巻毎に新しき事物こも〴〵現れ物語の筋の轉換すること猶はしり行く車の上にて四方の景色を觀るがごとしさるからに前段の事柄は中途にして立消となり再び其結果を說出すべき約束もなうして他の因縁なき事柄の物語に遷り又は前回の人物はいかゞ成行しや敢てくわしくは說も盡さで更に他の人に及ぶなんど通篇脈絡離々として關係きはめて疎漏なれども小說にては之と異なり首尾常に照應せざるべからず前後かならず關係なかるべからず若し本と末と聯絡なく源因と結果と關係なくんば之と小說とはいふ可らずさゞありのまゝに世上の事實を筆にまかせて書記せる實錄に似て實錄ならざる異しかる假作話といはまくのみ

曲亭の翁かつて小說の法則を論じていへらく唐山元明の才子等が作れる稗史にはおのづから法則あり所謂法則とは一に主客二に伏線三に襯染四に照應五に反對六に省筆七に隱微をなえち是のみ主客は此間の能樂にいふ「シテ」「ワキ」の如し其書に一部の主客あり又一回毎に主客ありて主もまた客になることあり客もまた主にならざると得ず又伏線と襯染は其事相似て同じからず所謂伏線は後にかならず出すべき趣向あると數回前に些と墨打をして置なり又襯染は下染にて此間にいふ「シコミ」のおとなりこは後に大關目の妙趣向を出さんとて數回前より其事の起本來歷をしこみおくなり金瑞が水滸傳の評注には縮染に作れり即ち襯染にれなど共に「シタゾメ」とよむべし又照應は照對ともいふ譬ば律詩に對句ある如く彼と此と相照して趣向に對を取るをいふ照對は重複に似たれども必ず是れなじからず重複は作者あやまつて前の趣向に似たる事を後にいだりて復出をいふ又照對はわざと前の趣向に對を取て彼と此とを照らすなり譬ば船蟲媼内が牛の角を以て戳せらるゝは北越二十村なる闘牛の照對なり又犬飼現八が千住河にて繫舟の組撃は芳流閣上なる組撃の反對なりこの反對は照對と相似ておなじからず照對は牛をもて牛に對するがごとし其物はおなじけれども其事は同じからず又反對は其人は同じけれども其事は全じからず又省筆は事の長きを後に重ていはざらん爲に必ず聞かでかなはぬ人に偷聞させて筆を省き或は地の詞ともてせずして其人の口中より說出をともてながらぞ作者が筆を省くがさめに看官もまた倦ざるなり又隱微は作者の文外に深意あり百年の後知音を俟て之と悟らしめんとす水滸傳には隱微多かり李贄金瑞等はいへばさらなり唐山なる文人才

べく嘲るべき道戯し事のみ綴りいだして世を諷刺するを旨となせしが今の所謂快活小説は大に之と異なる由ありまさ必ずしも詼謔洒落を其主眼とはなさゞるのみろ間々哀切なる話談をさへに其脚色中に加ふる事あり我小説より例を擧なば八犬士傳も弓張月も快活小説の部類なるべし之を要するに快活小説にては其篇中の主公となるもの大團圓の場にいたりて身恙なく榮ゆれども悲哀小説は之と異なり其結局に近づくころ其篇中の主人公が墓なき最後を遂る由を其趣向とはなすものなりされば今日の小説家は悲哀小説のうちにさへも數々快活なる話談をさしはさみ又は詼謔をもまじふることあり蓋しさやうになさゞるときには讀者が終に倦むべければなり故に今日の小説にはほと〳〵堵ラゼヂイ(悲哀小説)と古メヂイ(快活小説)との區分判然さらざる如く殊に快活てふ文字の如きは頗る適えざる場合も多かりされぱおろ近きころ英國の學者などがしは弓張月または八犬傳の如き小説をば堵ラゼ古メヂイと呼做しされ堵ラゼ古メヂイとは哀歡小説の義なり想ふに妥當の名目なるべし

純粋なる快活小説と綴るに當りて最も忌嫌ふべき條件といふは鄙野猥褻なる脚色是なり作者の見識低きときには間々滑稽の種にくるしみ詼謔の料を求めかねていと賤しむべき事柄をさへに其物語のうちに加へて笑ひを買えまく望める事あり一九の膝栗毛金鸞の七偏人の如き是なり我維新前に行はれし小説として之を評すればきはめて巧妙の小説なれども之を眞成の小説視して更に評論を下すときはほと〳〵讀むに堪べざるものあり蓋し「下がゝり」の物語多ければなり英國の小説家塾ケンスの著しさる比クヰツク平パルスの如きは純然たる快活小説の一種にして通篇詼謔に成るといへども決して猥褻なる脚色もなければまた陋しげなる文字もなし蓋し滑稽の基くところの陋猥の事物にあらざるがゆゑなりおよそ滑稽戯謔の秘訣は端嚴倨傲高尚なるものと粗魯賤劣鄙猥なるものとを巧にまじへて叙するにあり例ば「つまらざるもの」とは「たいろうなるもの」のやうにいひなし賤しげなるものを高尚なるものゝやうにいひなすなんども笑ひを博すべき一方なりあるひは老實なる人の粗忽なる振舞あるひは倨傲なる人物の「へこまされし」体裁等總て滑稽の料なるべし畢竟偶然の間違よりして發生なすべき條件には笑の種となるもの多かり豈かならずしも淫事状もて詼謔の料となすを要せん

に好憎の偏頗ありなば彼の神聖をもあざむくべく彼の堯舜をも走らすべき聖人君子と幾人となく我明治の世に出し得べく彼の桀紂をも戦栗せしめ彼の盗跖をも怕れしむる残忍非道の悪人とも文明の世に現し得べし我従来の小説作者は最も愛憎に偏るものなり蓋し作者が情態をばたゞありのまゝに叙する心得にてありたらんには決して此弊のなき筈なれども彼の浅墓なる童幼婦女子の嗜好に媚んとなしけるからさてこそ偏頗の好憎をも自然に行ふ事とはなりけれ童幼婦女は浅墓なれば善人なれば常に正しく悪人なればいつも〳〵邪ならめと思ふべけれど善人にもなほ邪なる煩悩あり悪人にもなほ純善なる良心ありて時に発動する事あり作者たるものかりそめにも此理に心を注がずして其人物を造作せば情態人情ふたつながら此人界のものにあらぬ奇怪のものともなりゆくべし作者それ之を思へ

（第六）特別保護

特別保護といへる事は好憎の偏頗より生ずる事にてこもまた人物に関することなり上文の理由によりて作者が主公を偏愛することます〳〵甚しきにいたるときは只管主公の身を庇護して危険の場合に臨むごとに必ず之を援ふことあり悲哀小説にあらざるよりは其主人公を殺すことはもとより成がたき事なるから之を援ふはあながちにあらねどあまりに特別に之を保護して其危難をしも免るゝは其人物の身の上には常に定まりたる事の如く読者に思はるゝはいと拙し譬ば八犬伝中なる八士の如きは無難無死の神仙なり殊に犬江の仁の如きは殺したりとも死ざるべし蓋し伏姫の神霊といふ護神あるがうへに別に霊玉の助あればなり畢竟馬琴の大筆になりたればこそ此疾病にも心づかで彼の長篇とば読むことなれども若し他の作者の小説なりせば第八九輯にいたりし比には人みな眠気を催をべし英国の小説家にも之に類する者あり李チヤアドソンの如き其一例なり

（第七）矛盾撞着

矛盾撞着は脚色の上にもいふべく叙事の上にもいふべし今一例とあげていひなば新編神稲水滸伝ははじめは岳亭翁の筆になりて知足軒主人其続編を綴れり故に撞着の趣向ありとも其大概は恕すべきなれども一箇の甚しき撞着あり読者の興情を損ずること小少ならずと思はるればこゝに提出して例ともなすべし岳亭翁が綴りさりし篇中にては玉置現九郎と形容して色黒く骨たくましく眼つぶら云々とありしかるに

で窺ふ事を得べしかゝる瑣細なる事實をさへに限なく寫しいだすことハ正史のなし得ざる所にして小説の得意とする所になん

其他風習衣裳の如きも正史の中にハ畫くが如くに寫しいだすハ難かるべし小説家にして之を寫すハきハめて便宜の多かるのミか活風俗史となするに近かり數コツト翁の如きハ最も時代小説の髓を得たるものなり馬琴京傳の如きハ其名ハ時代物語の作者なれども其實世話物の作者に近かり蓋し馬琴等の叙する所ハ當時の風俗衣裳にハあらで寛永以降の風俗とハ「ぼんやり」叙したるに外ならねばなり

時代物語と綴るに當りて最も注意すべき重なる事項ハなるべく正史の裏を描きて表と省略する事なり表とハ正史に記載したる事なり裏とハ正史に知られぬ事なり曲亭翁の弓張月に彼の保元の軍を摸様をたゞ陰影にのミ叙しれりしハ外傳の旨趣を得たるにちかく頗る妙なりといふべきなり又朝比奈巡島記にて北條時政が奸佞なる臟腑肺肝とさぐりいだして仔細に寫したるもいと妙なり其他侠客傳美少年録のたぐひも此点よりして論を下せバまづ大方ハ純然たる時代小説といふとも可ならん

畢竟するに時代物語の目的ハ風俗史の遺漏を補ふと正史の缺漏を補ふとの二点にあり故に此二ヶ條の目的の其一とだに達し得なバ其本分ハすなはち足るべし是非正史上の太事實もしくハ正史上の人物とバ引用するにも及ばざれどもなるべくだけハ風俗遺事及方ともにならび存して其物語の髓ともなりなバ最も完全と稱すべきなり

正史物語を編むに臨みて作者がしば〳〵醸し易き疾病一にしてたらざれども其重なるハ第一ハ年代の齟齬第二ハ事實の錯誤および第三ハ風俗の謬寫是なり

年代の齟齬ハ正史家だに間々之と行ふ事なり妄誕假空の小説にハ些少の間違ひありたればとて敢て苦しからぬやうなれども決して望ましき事にハあらねバ及ぶべくだけ年代にも齟齬なからしむると要するなり蓋し年代に甚しき相違謬妄ある時にハ其物語の美妙にして真に逼るにも係らず讀む人具眼の人なりせバたちまち妄誕にこゝろづきて彼の夢幻界に逍遥して古人に親昵する感覺をバ亡失なすことあるべけれバなり我從來の小説作者ハ此相違と意とせず公然よむ人にうちむかひて其無要なるを説きしもあり曲亭翁の如きハさすがに此点にも注意せしかバ八犬傳といひ巡島記といひ假にも時代物と稱する者にハさまで甚しき錯誤ハなし但し翁が得意の作さる侠客傳にハ此病も多少見えたりしと記憶し居れり

脚色複雑なる稗史に於ては主公を幾組となく設くる事あり笠頭翁が著したる慨世士傳(莉莚自外傳)にては作者が莉莚自(男本尊)に配するに那以那姫を以てし亞度利安(男本尊)に配するに愛蓮孃を以てし門兎利以瑠(男本尊)に配するに阿地羅陰女と以てせり

又男本尊ありて女本尊なきことあり女本尊ありて男本尊なきことあり譬ば朝比奈巡島記にては男本尊には義秀あれども之に配すべき女本尊なし又翠翹傳(馬琴之と翻案して金魚傳といふ)にては女本尊には翠翹あれども之に配すべき男本尊なし以上二例はいまだ的例とはいふべからずと雖も今記臆中に好例なきまゝ假に之をもて責をふたぐ

又一部の中に夥多の男本尊を設くる事あり八犬傳巡島記大内十杉傳尼子九牛士傳幷に水滸傳等是なりされはあれ此類の小說には自然に主人公に等級ありて所謂中央主公なるもあり譬ば巡島記の朝比奈慨世士傳の莉莚自等是なり

今幼童のために更に二三の例をあぐべし

白縫物語
(男本尊) 青柳春之助　(女本尊) 若菜姫

兒雷也物語
(男本尊) 尾形周馬　蛇麻呂　(女本尊) 綱手

美少年錄
(男本尊) 末晴賢　(女本尊) 兒金

弓張月
(男本尊) 爲朝　(女本尊) 白縫姫

我國の小說には主公と主公ならざるものとの區別判然せざるも多し神稻水滸傳にては小幡信行と稻葉鬼門が中央主公にして餘は第二等の主人公なるべし

總じて小說を讀むに當りては其後回の脚色の如何を問ふよりはむしろまづ主公の性質に注意するを常とする者なり若し小說の主公にして非凡異常の人質なりせば讀者おのづから之を景慕し其將來の成行とも充分得知らまく望むは常なり故に脚色を好妙にものする事の外に讀者の注意を促がすべき卓越非凡の本尊をば設置なすこと必要なりされはとて才色兼備にして且善良なる人物をば常に主人公となすを要せず若し

たゞ讀者を感動して非常の注意を促がすべき非凡の資格を有したらんには醜惡奸邪の人物といへども得て主人公となすべきなり美少年録の主公の如き金瓶梅の主公の如き皆此例となるべきものなり或は累阿岩の如き容貌醜惡なる女性をもて其本尊となすも不可なし但し陋劣なる愚蠢の人物もしくは怯懦なる人物とば主公となすことは忌むべきなり何となれば此等の陋劣なる本尊は唯に讀者の感奮を牽起すの力なきのみならずなか〳〵に讀者をして其陋劣なる事蹟をしえ知るを嫌えしむる傾向あればなりされはあれ滑稽の小説には此等の種類の主公を用ひてかへりて大功を奏する事あり故に滑稽の著作に於ては之を用ふるも妨なけれど他の着實なる小説にはつとめて之を忌むべきなり

醜惡奸邪の主公を立るは敢て妨げずといひたれども奸邪の主公を設けしときには成べく之に照對する良主人公を作るを要とす馬琴が美少年録を綴るに當りて惡少年末朱之助等に照對するに杜四郎成勝等を以てせしも妙々車に惡子魔土六に對する孝子志土六あるも時代鏡に藤波由縁に對する白山雪若あるも皆此必要より来りし者なり蓋し重に脚色の雑駁を要すればなるべし特り小説の脚色のみならず總じて美妙の技術に在ては脚色の統一と趣向の雑駁とを要するものなるよし其脚色は周到にして通篇の脈絡は通徹するとも趣向に雑駁の性質なくあるひは單に醜惡なる奸邪の人物の身の上のみ毎篇毎章に綴りいだしあるひは單に賤むべき卑屈の惡徒の事蹟をのみ間斷もなく寫しいでなば讀むもの終には之に倦みて巻を讀み終るに堪へざるべし譬ば人の刑せられて頭を梟木に懸らるゝや其最先の一日には男女老幼貴賤の別なく皆爭ふて之におもむき蟻のごとくに集り来て其醜貌を見るといへども一二三日と經るに及べばみな一様に嚬避してまた其頭はいふも更え其梟木だも見るもの稀なり若しそれ人の性質たる珍奇を好むに切なるから物の醜美と善惡とを問ひ試むるに及ばずして其奇なる状のみもてあそべどさはとて醜惡を好むの念善美を好むにまさるは稀なり否うつくしきをめでたしむは我人間の天性にて他の醜きをめでたしむは僅に反動なり變則のみ元来正當の事にあらねば之に饜くことも早かるべし是小説に善惡の兩主公なからざるべからざる所以なり曲亭馬琴の知己なりける琴魚といふ人の著したる青砥の石文といへる冊子は馬琴の校閲を經たりしものにて其文章も拙からず且其趣向もおさなからねど其全篇の主公となるもの總じて醜惡卑劣にして毫も讀者の愛

慕心と喚起することあらざるから最初の三四巻と終りしころにほとゝ讀とえらん執心なし其男本尊たる名艸劇齊(松井長菴と翻せし者)にいふに及むず女本尊たる阿れきをえじめ其他の人物にいたるまでも悉皆陋劣の匪徒のみにて行往進退一舉一動たゞ讀者として忌嫌へる心と喚起せしむるのみ其中に熊野丹藏といへる人物のみに頗る正廉の人質なれどもこれまた前の劇齊等の強惡非道に匹敵する良主公とにいひがたかり是此冊子の過失にして作者の平生誡むべき一大欠典といふべきものなり

主公を造作するに二流派あり一を現實派と稱し一を理想派と稱す所謂現實派に現にある人を主公とするあり現に在る人を主公とするとに現在社會にありふれたる人の性質を基本として假空の人物をつくることなり為永春水をえじめとして其流を汲む人情本作者にみな此流派の者なるべし所謂理想派に之に異なり人間社會にあるべきやうなる人の性質を土臺として假空の人物を作るものなり現實派にありふれたる人と材料とし理想派にあるべきやうなる人を材料とせ是その相異なる要點になん然り而して在べきやうなる人質と作るにもまたおのづから二方法あるべし所謂先天法(演繹法)と後天法(歸納法)となり先天法とに己に定斷せる理想上の性質とに仔細に分拆解剖して以て篇中にあらえれさる主公の性質を造ることなり曲亭翁の主人公に此法によりて成りたるもの多し八犬傳の八犬士幷に巡島記の三傑れ如き最も著明き例なるべし何となれバ八犬士に仁義禮智忠信孝悌といふ形而上れ性質をバ細に解剖分拆して形而下乃場合に應用なしえかして作りたる人物なり語とかへて之といへバ八行といふ無形のもれとバ有形れ人に擬しさるなり巡島記の三主公も之になじく義秀に勇といへる一徳性と特異乃一個人の上に表明えさる者なり源冠者義邦に仁といふ無形れ性質と有形の一人物の上に應用なしさる者なりさてまた光仲に智といふ形而上れ人質とバ形而下乃人に擬しさるなり想ふに先天の方法さる頗る面白き手段にはあれど作者が充分意を注ぎゝ斟酌折衷となさゞる時にハ人間に似て人間ならざる異様の怪物を造ることあり八犬士傳れ八主公がさながら聖賢其人れ如き希有異様なる人となりしも蓋し哲學者れ理論をもて其根據となせバなるべしかくいへバとて先天法をバ決して非とするにはあらぬものから唯此法もて(時代小説と綴るに當て)歴史上に已に名状えられし人物をバ作るにえなえざ不可なる事なり譬バ朝比奈義秀の如きハ現に歴史上の人間にて假空虚説れ人物ならねバ之を示しゆまゝに勇に擬え

て其言行と製作するははなはだ不當なる手段といふべし已に前條にも論ぜしごとく時代物語の目的たる史に脱漏せる事蹟を補ひ現に其人に親昵むごとき一種微妙の感覺をば讀者に與ふるに外ならざるなりしかるをあながちに意匠をもて勇てふ徳性に擬したらんには其物語の朝比奈義秀は現に歴史上にあらはれたる朝比奈義秀とはなとあらす同名異人なりといはまくのみ其實際の功績はしばらくおき其理論上につきていへば斯く歴史中の人物をば作者が專斷の意見をもて所謂先天の手段に用ひて自儘につくるは非事なるべし否第一に肝要なる時代小說の神髓をば忘却なしたるものといふべし近きころ矢野文雄大人の纂譯せられし經國美談といへる書は智と徳性と情緒とを三傑に擬したるなりとある博識が評されたり此事はたはて然らんにはあまり面白きことゝは思はず何となれば彼の以パミノンダス邊ロピダスの輩は現に正史中の人間にて假設の人物にあらざればなり

後天法(歸納)は前とおなじからず作者が想像の力をもて此人界にあるべきやうなる種々の性質をば撰集めて程よく之を調合なし以ゝ人物を造るの法なり故に此法を用ふる作者は重に實驗と觀察とを其必須の手段として人の性質の原素となるべき種々の性情をば造れるから前の先天派の作者の如くにあまりに極端なる空理によりて人らしくもなき人間をばつくる程にはいたらぬなり英の數コツト翁をはじめとして十八世紀の小說家は大むね此派の者なるべし笠頓翁の如きも頗る此流を汲むものに似たり

現實派は前の二派に異なり現にある人を主公とするなり梅暦の丹次郎源氏物語の光君の如き即ち是なり春水翁の時代には丹次郎其人の如きもの幾個も世の中にありしなるべく又式部刀自の時代に於ては彼の光君に似たりし人現に貴紳中にありしなるべしされバこそ曲學の和學者なんどは源氏物語を評論して時世を諷誡せし書ぞといひ其篇中なる男女の如きもみなそれぞれに時の人を表せしものぞといひつたへき是ははなはだしき誤謬にして彼式部刀自が現實派の作者たりしとしらざるものなり之を要するに現實派は其門に入るに易くして其室に登るに難く理想派は其門に入るに難くして其室に登るに易かり其故いかにとなれば前者はありのまゝの人情をば寫しいだすを主とするゆゑあながち作者の工風をもて完美完善の標準をば製作なすべき必要なししかるに後者は之に反して醜美善惡曲直正邪總じて作者が理想になり且

其工風にいづるがゆゑにまづあらかじめ獨斷もて醜美の標準を定めおきて扨善惡の人物とバ作り設くると必要とすしかして件の標準にして若し充分に高尚ならざれバ脚色もしたがつて卑しくなり若しまた高尚に過たるときには人間には似ぬ人物とハ造りいだすること間々あるなり是第一の難義にしあれどたゞ標準だに過不及なくんバ其餘は作者の意匠ともて造作すること易かるべし現實派は之に反して入門の後に苦勞多かる物に喩へて之をいへバ現實派は人間の形を畫く畫工のごとく理想派は天人と畫く畫工のごとし人間の形を畫き得るものはあまたあれども畫き得て神に入りたるものは尠し天人を畫き得るものは尠なれども或は畫き得て人を感ぜしむる者も多かるべし蓋し虚實の相違のしからしむるものなりかし

上巻なる小説の主眼の章下に於て已にも幾分か論じおきし如く小説中の人物を作るに當りて最も注意を要すべき事は作者の性質を掩ひ藏して之と人物の擧動の上に見えしめざるやうにする事なり自己の性質と材料として假空の人物を作らんとすれバ自然におなじ質の人物のみ幾人となく出くるゆゑ其物語の趣さへ終にはうそらしう思へるなれバ讀人もまた興を失ひ彼の夢幻界に遊ぶが如き佳境を覺ゆること能はざるべし初心の作者が著述類には間々此疾病ある事なり七偏人并に和合人の如きハ其脚色は面白けれども此疾病のあるが爲に他の膝栗毛と相並べて其優劣を論ずる時には雲壤月鼈の差あることいふまでもなき事なりかし何となれバ七偏人中の道樂者を和二郎一人を除くの外は總じて同質の人間にてほとんど同一人の如く思はるゝなり類は友を集め同氣相求むとはいへど斯ほどまではなはだしく言行双つながら相同じき人間あるべしとは信じがたかり若し肩書の人名なくんバ七偏人とは名目のみにて篇中はわづかに二三人の人物の外に見るものなからん蓋し通篇の言論行爲は概して同轍同脈にして七人の人物の言行とは思はれずさながら作者が獨語のごとく思はるれバなり物に喩へて之をいはゞ彼の乙女子等が翫べる役者百面相といふ玩具に似たり百日鬘を被らすれバ石川五右衛門の容貌となり坊主鬘を被らせれバ横川覺範の面となり蜻蜓鬘を被らせれバ猿廻し與二郎となり島田鬘を被らせれバ白拍子花子となる其容貌は異なれども其人は常に相同じくつくづく見れバ此も彼も芝翫の容貌に外ならねバたゞ女童は淡々しき眼を娯ましむる由あれど決して大人識者をして其奇に感ぜしむるに堪へざるなり